

THE MAN WHO FELL TO EARTH

地球に落ちて来た男

宇宙のかなたから
はかり知れない衝撃をもって
ひとりの男が来た………



THE MAN WHO FELL TO EARTH

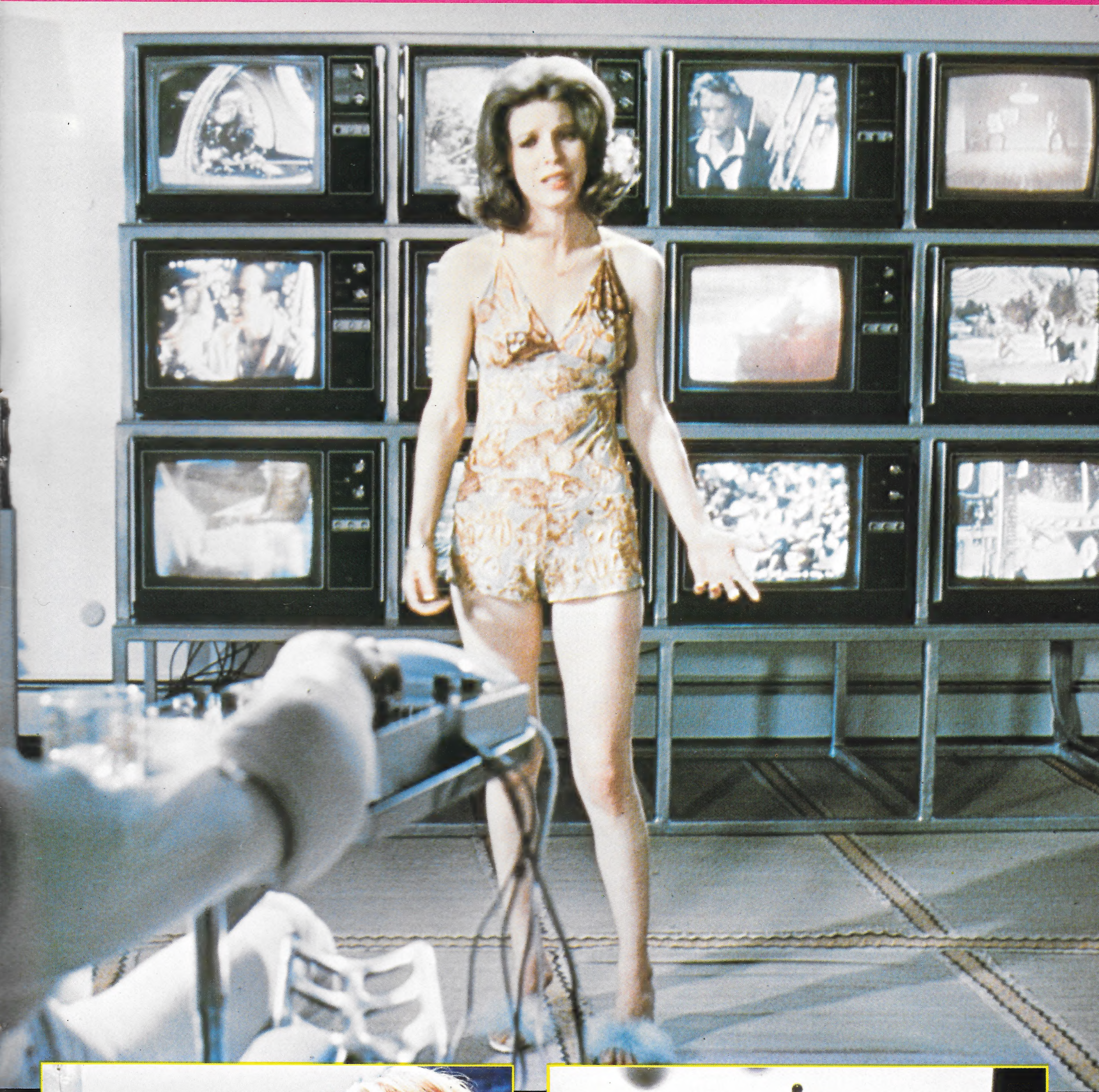
地球に落ちて来た男

イーストマンカラー／パナビジョン

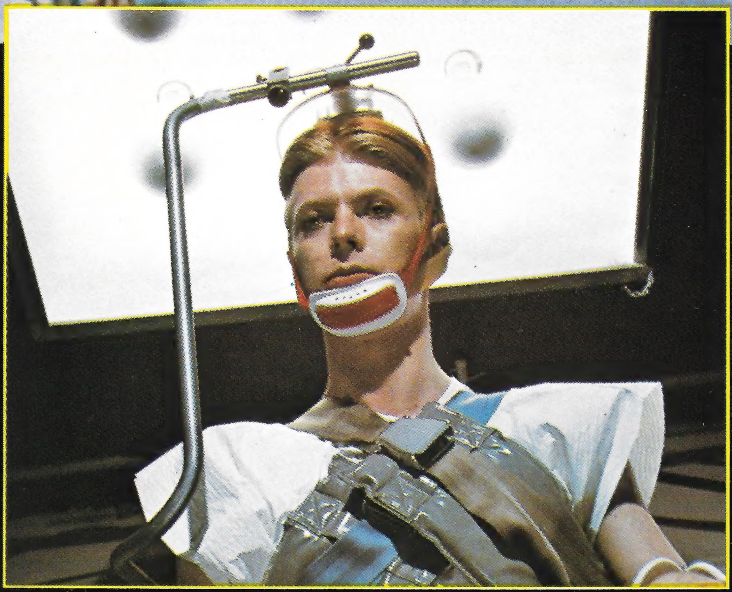
コロムビア映画 Columbia Pictures



DAVID BOWIE

















解　説

主人公が宇宙人だということで、ＳＦ映画だとしてしまうと、ひょっとして、いわゆる宇宙モノととられるきらいがあるかも知れない。が、この作品はそう思って見るとはぐらかされてしまう。むしろ、主人公がたまたま宇宙人なのだと考えた方がわかりやすいかも知れない。そして、そこにくりひろげられる物語は〈愛〉の物語。

ストーリーは、はるか彼方の惑星からひとりの男が地球に不時着したところから始まる。そして、地球人には計り知れない高度な知能から生み出された驚異的発明によって、巨大な企業が誕生する。一方、その男は未知の存在などにはまったく無縁な、典型的なアメリカン・カントリーガールと知りあい、愛の生活を始めるが――。やがて彼と周囲の状態との間のひずみは亀裂となって破局を迎える。ひとつの星くずともいえる存在になった宇宙人。アーティ・ショーの『スターダスト』がかぶって、この映画は終る。

映像派のニコラス・ローグ監督は「この映画はラブ・ストーリーで、それは私のいちばん描きたいジャンルだ」と語っているが、もうひとつ彼が興味を抱いているテーマがある。〈時〉である。この映画では、時間にしばられている地球人とそうでない宇宙人の対比が描かれる。年をとる地球人、そして最後まで年をとらない宇宙人。

その宇宙人に、ロック界のスーパースター、デビッド・ボウイが起用されているが、彼の両性的個性は、まさに宇宙人そのものみたいにピッタリ。歌を歌わない、純粋に演技だけの勝負である。脚本のポール・メイヤーズバーグは、主人公に、「私の人生は秘密ではないが、個人的なものなので公表しない」といった大富豪ハワード・ヒューズのイメージを投影したかったといっている。

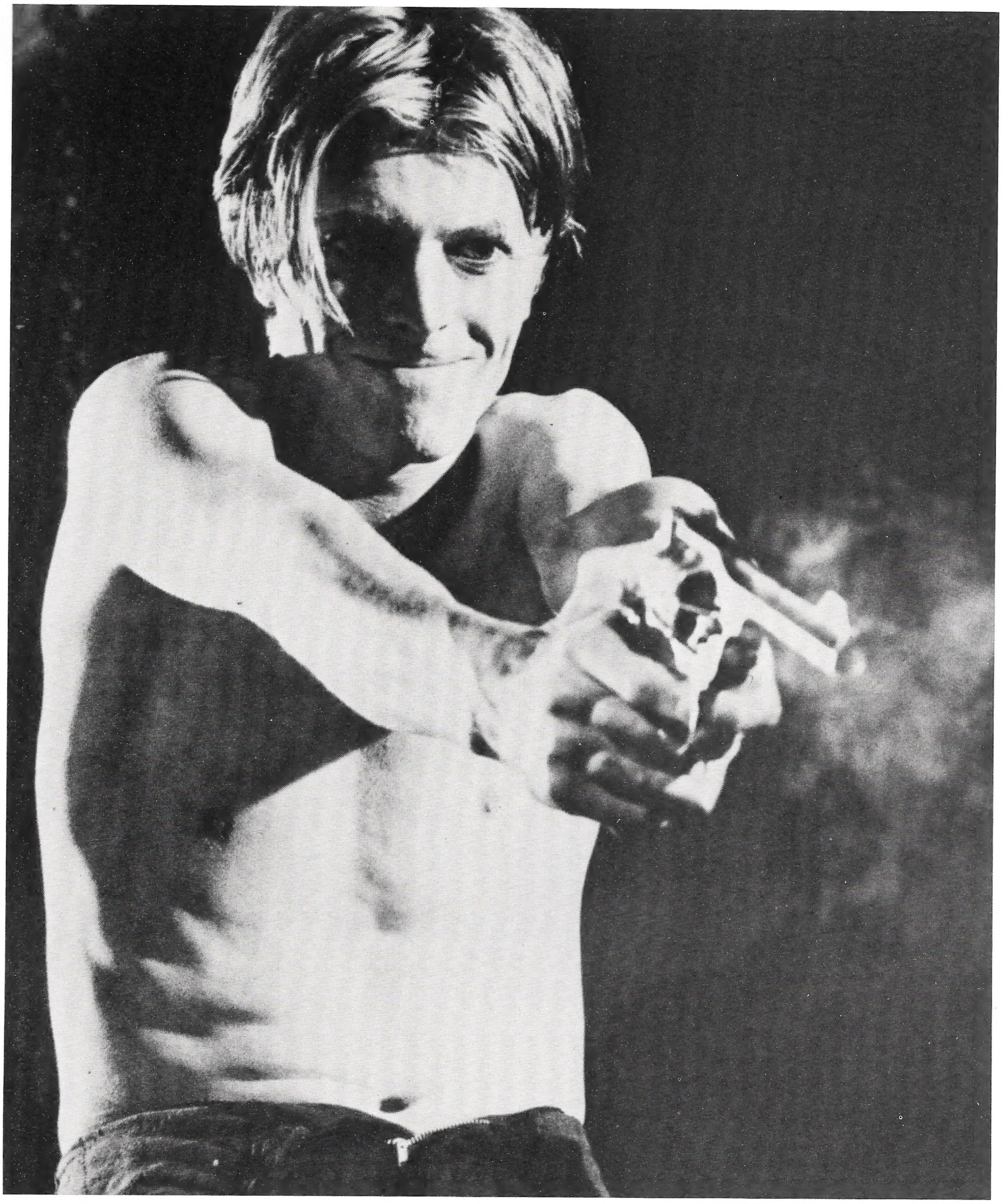
「ハスラー」を書いたウォルター・デビスの小説『地球に落ちて来た男』が、この映画の原作である。

デビッド・ボウイの相手役は「アメリカン・グラフィティ」のキャンディー・クラーク。そのほか、「シンシナティ・キッド」のリップ・トーン、「卒業」「イルカの日」の脚本家で知られるバック・ヘンリーが演技者として脇をかためている。音楽は、今や世界的に有名なパーカッショニスト、ツトム・ヤマシタの曲が６曲使用され、他に「スターダスト」「ハロー・メリー・ルー」などスタンダードのポピュラー・ナンバーが十数曲挿入されている。

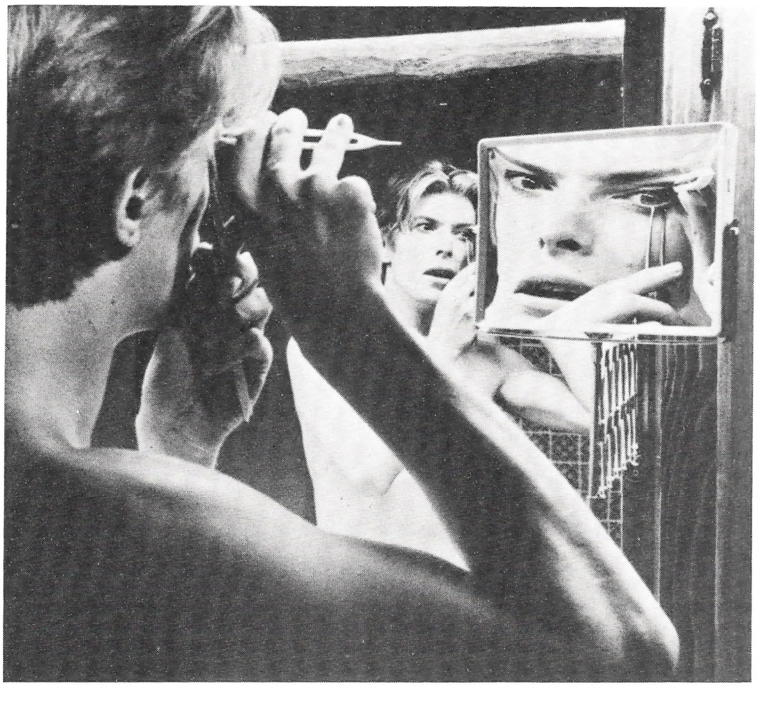
ロケーションは、アメリカのニューメキシコで行われた。

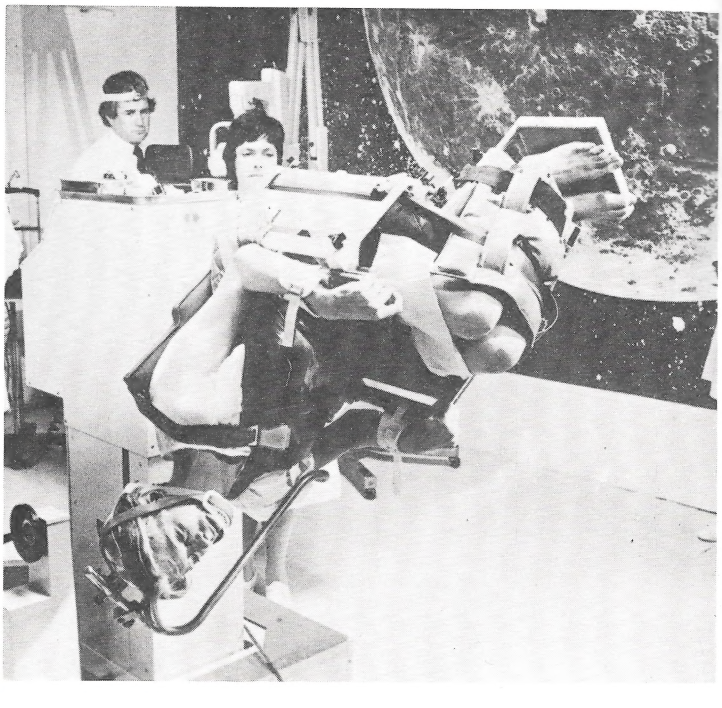
なお、デビッド・ボウイの衣裳は、すべて彼自ら選んだものである。













FELL TO EARTH



THE MAN WHO







■監督ニコラス・ローグについて

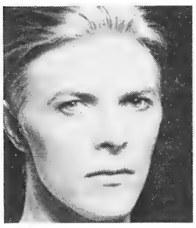
「地球に落ちて来た男」が日本でのデビュー作だが、イギリスではすでに高い評価を受けている映像派の新進監督。

ローグが映画界に入ったのは18年前。最初の15年間は、カメラマンとして「華氏451」「アラビアのロレンス」「遙か群衆を離れて」等の作品にたずさわってきた。

この期間、みっちり感覚をみがき、このことがのちの彼の監督作品の大きな特徴として現われてくる。「地球に落ちて来た男」では、湖のシークエンスをはじめ、随所にそのすぐれた才能が輝やき、とりわけ、粘液の中でくりひろげられる宇宙人のセックスのイメージ・シーンが秀逸である。

17才の時、映画監督を目指したという彼、“WALK ABOUT”でデビュー。ついでミック・ジャガー主演の“PERFORMANCE”、ジュリー・クリスティとドナルド・サザーランド主演の“DON'T LOOK NOW”を監督した。なお、コロムビア映画の最新予定作“ファン・クラブ”が大いに期待されている。





●デビッド・ボウイ

ロック界のみならず映画界にもその特異な才能を発揮したデビッド・ボウイ。彼は1944年サウス・ロンドンの生まれ。

高校中退後、広告代理店でイラストレーターとして働いた後、音楽グループを結成。一やくスーパー・スターとなった。一時音楽活動を停止していたこともあったが、1971年、「ハンキー・ドリー」を発表以後、次々とヒット・アルバムを生み続けている。

最新アルバム「ステーション・トゥ・ステーション」ではジャケットにこの映画の場面写真が使用されている。



●キャンディー・クラーク

「アメリカン・グラフィティ」で注目され、アカデミー助演女優賞にノミネートされた、有望な若手女優。

高校卒業後、職を転々としていたが、ニューヨークでモデルをしている時、あるパーティでジャック・ニコルソンの目にとまり、“FAT CITY”でデビュー。2作目が「アメリカン・グラフィティ」である。

以後テレビ、映画にいくつか出演し、今回の出演となった。趣味は読書と音楽。特に、ジェイムズ・ブラウンとデビッド・ボウイが好きだという。

















ストーリー

ある日、私たちの住む水と自然に囲まれた緑なすこの地球に、高度な文明を持った異星からの来訪者があるかもしれない。その時、私達はどのように迎えるだろうか。恐怖か、愛か、それともずるがしこい人間の餌食としてだろうか？——。そしてそれは今、訪れる。

遙かな宇宙から、地球目掛けてやって来る宇宙船があった。その宇宙船は、目も眩む閃光を放って、ニューメキシコの片田舎の湖に、不時着水した。この地球に降り立ったのは、異星の人トーマス・ジェローム・ニュートン（デビッド・ボウイ）であった。今、彼の星では日に日に、生物は死に絶え始めていた。地球の未来を予知していたニュートンは、互いの繁栄のために、地球に警鐘を打ち、また故郷の星との共存を願っていた。彼は、徹底した訓練を受けて、地球人になりすましているが、内心は緊張と恐怖でふるえていた。

一路、寂れた田舎町ヘイニービルに向かったニュートンは、星から持参した指輪を雑貨商で売って当座の生活の資金を手に入れた。ニュートンは、託された使命を一歩一歩前進させるため大都市に向かった。そして、自分の発明の特許を申請すべく、弁護士のオリバー・ファーンスワース（バック・ヘンリー）に会った。ニュートンの不思議な挙動に、不審を抱きながらも、ファーンスワースは、彼が持参した書類をめくり始めた。見終ったファーンスワースは驚いた。その書類には世界的な７つもの特許が含まれていたからだ。さらに驚くことにはニュートンは、彼に一切の信頼をおき、かつてない大会社の設立を依頼したのであった。この新会社ワールドカラー社が売り出した驚異的な新製品を見て驚いたのは、科学者のネイサン・ブライス教授（リップ・トーン）だった。女子学生たちとの浮気を楽しむプレイボーイ教授だったが、科学者としての彼の眼は鋭かった。

都会にあっても秘密主義的生活を続けていたニュートンは、真実も告げず突然、ファーンスワースにワールドカラーの権利をイーストマン社に売却することを伝えて、自分は、ニューメキシコの片田舎のホテルに引きこもってしまった。ホテルで初めて乗ったエレベーターは彼にとって、死ぬほどの恐ろしい体験となった。死んだようにぐったりしたニュートンを、手厚く看護したのは、メイドのメリー・ルー（キャンディー・クラーク）であった。地球に来て以来、ずっと孤独な生活に耐えてきた彼は、優しい彼女に故郷の星に残してきた妻の面影を見るのだった。ある日、彼女を伴って、宇宙船が着水した湖を訪れたニュートンは、この美しい自然の中に疲れた翼をやすめるように、メリー・ルーとの生活を始めるのだった。

一方、ファーンスワースは、ニュートンの命を受けてブライス博士を、新しく設立したワールド開発に招いた。ブライス博士は、仕事の内容も告げられぬまま、ニュートンが住む湖畔の対岸に住むことになった。ニュートンとメリー・ルーの生活は、この別天地で続けられたが、なぜか彼の心は晴れなかった。テレビに取囲まれたリモートコントロール・チェアーに無言で座るニュートンは、メリー・ルーの言葉にも耳をかたむけず、口にしたこともなかったウイスキーさえも飲むようになってしまった。

ブライス博士とニュートンの最初の会見の日が訪れた。ニュートンは、秘密裡に進めていた計画をブライス博士に見せるために研究所につれていった。そこで博士が案内されたのは、宇宙船の内部であった。前々からニュートンの人間とは思えぬ高度な知性に、疑念を抱き続けていたブライス博士は、彼のX線写真を撮ろうとニュートンを自宅に招いた。その夜、現像された写真には、人間とは判別しがたい姿が写し出されていた。

メリー・ルーは、ニュートンを心から愛していたが、いつまでも彼の正体も、真実の愛もつかむことが出来ず、ヒステリックにあたりちらすのだった。悲しみに包まれたニュートンは、浴室に入った。しばらくして、彼は出て来たが、メリー・ルーがそこに目にしたのは、人間とは思えぬ恐ろしい姿であった。彼女と別れたニュートンは、ブライス博士に会った。ニュートンが語る言葉から、彼の謎が明かされ始めた。

月日は流れ、地球を後にする日が近ずいたことを知ったニュートンは、メリー・ルーへのささやかな愛の証しとして、ファーンスワースに金を託した。

ニュートンの世界初の宇宙単独旅行は、世界注視の的となり、発射台に集まった人々は、熱狂的興奮に包まれていた。だが、現体制までも変えかねないワールド開発の巨大化に、かねてから脅威を感じていたアメリカ政府は、今まさに、乗船しようとしていたニュートンを捕えてしまった。ニュートンからワールド開発の前途を任されていたファーンスワースも何者かによって、高層ビルから投げ出されて殺された。こうしてワールド開発もニュートンの存在も世界から抹殺されたのであった。そして軟禁されたこの不思議な人物の解明のためにサディスティックな人体実験が続けられた。

時の流れはあまりにもはやく、あれから数十年が経過していた。今では、ニュートンは人々からすっかり忘れ去られた存在だった。しかし、彼の存在を忘れていない人達がいた。それは、一つ屋根の下で老いの生活を共に続けていたブライス博士とメリー・ルーであった。なんとかニュートンを助けようと思いたったメリー・ルーは、依然として軟禁されている彼に会いに行った。メリー・ルーは、彼の年をとらぬ姿に、昔を想いおこすが、決局お互い心の内に、無力感を刻むだけであった。

孤独と虚脱の日々を送るニュートンは、ある日、軟禁されている室のドアに何気なく手を触れた。すると、思いがけなくもドアは、静かに開いた。今、数十年の軟禁生活から解放されるのだ。半開きのドアの向こうから世界が彼を呼ぶかのようだ。はやる心をおさえて、さらにニュートンはドアを押し開いた……。

THE MAN WHO FELL TO EARTH



■キャスト

トーマス・ジェローム・ニュートン………デビッド・ボウイ
ネイサン・ブライス…………………リップ・トーン
メリー・ルー…………………キャンディー・クラーク
オリバー・ファーンスワース……バック・ヘンリー

■スタッフ

製作…………………………マイケル・ディーリー
バリー・スピキングス
監督…………………………ニコラス・ローグ
原作…………………………ウォルター・テビス
脚本…………………………ポール・メイヤースバーグ
音楽…………………………ジョン・フィリップス
美術…………………………ブライアン・イートウェル
撮影…………………………アンソニー・リッチモンド
編集…………………………グライム・クリフォード
衣裳デザイン………………メイ・ルース



■THE CAST

Thomas Jerome Newton……………DAVID BOWIE
Nathan Bryce……………………RIP TORN
Mary-Lou…………………………CANDY CLARK
Oliver Farnsworth………………BUCK HENRY

■THE CREDITS

Producers…………………MICHAEL DEELEY &
BARRY SPIKINGS
Director……………………NICOLAS ROEG
Based on the novel by……………WALTER TEVIS
Screenplay…………………PAUL MAYERSBERG
Musical Director…………………JOHN PHILLIPS
Production Designer……………BRIAN EATWELL
Director of Photography…………
ANTHONY RICHMOND, B.S.C.
Film Editor………………GRAEME CLIFFORD
Costume Designer………………MAY ROUTH



■MUSIC LIST

Porker Dice 33 1/2 Mandala Wind Words One Way Memory of Hiroshima	Composed & Recorded by STOMU YAMASHITA
Boys from the South	JOHN PHILLIPS
Rhumba Hoogie	JOHN PHILLIPS
Bluegrass Breakdown	JOHN PHILLIPS & MICK TAYLOR
Planets Suite	THE BOURNEMOUTH SYMPHONY ORCHESTRA
Blueberry Hill	LOUIS ARMSTRONG
Enfantillages Pittoresques	FRANK GLAZIER
Make the World Go away	JIM REEVES
Try to Remember	THE KINGSTON TRIO
Blue Bayou	ROY ORBISON
True Love	BING CROSBY
Love is Coming Back	GENEVIEVE WHITE
Stardust	ARTIE SHAW

提供 コロムビア映画会社／編集 松竹株式会社事業部 ￥250

THE MAN WHO FELL TO EARTH



Columbia Pictures